

医の道

- 一、木蓮が白い花びら咲かせおりその芳香が鼻腔に匂う
- 一、野や山に色とりどりの花咲けりその営みに吾驚嘆す
- 一、桜花そぼ降る雨に濡れて散るその情景にしばし佇む
- 一、八重桜春の最後を飾るかな深紅の太い花びらつけて
- 一、白頭鳥が桜めがけて突入す啄んでおり蜜を求めて
- 一、故郷に還りて医療ひとすじに尽し来たりて五十と四年
- 一、薬剤の仕事せし妻医師吾と小さき医院開きて久し
- 一、医の道は天の授けし道なればただひたすらに歩み来たりし
- 一、世の人の真心ありて吾は生く吾も負けじと強く生きねば
- 一、強くあれ優しくあれと人に説きその言葉にて吾も生きに来

- 一、病む人の貧しき人の友となり過ごしし生も日暮となりぬ
- 一、心病むあまたの人を癒さむや住吉の丘に「せいざん」は建つ
- 一、校医とし奉仕せし日の馬毛の島あの頃の子等いまは何処に
- 一、陽が落ちてほの暗くなる馬毛の沖漁火に似し灯ともりぬ
- 一、夕暮になれば心ふさぐらし静つと空見て涙ぐむ妻
- 一、コトコトと聞こえし妻の俎板の音が消え去り久しくなりぬ
- 一、しとしとと春雨の降る眞昼すぎ庭に向いて余生を思う
- 一、限りある生命なりせば桜花ちからのかぎり咲きゆかまほし
- 一、残されし幾許もなき年月を妻看取りつつ歩いて行かむ
- 一、汝れは生く吾も生きねば人の世を心残りのなきを祈りて

令和六年五月 田上 容正